



NEWS

No.71

December 1999

(社)日本工学アカデミー広報委員会

office : 〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-5-1
(新丸ビル4-007)

Tel : 03-3211-2441

Fax : 03-3211-2443

E-mail : academy@twics.com

URL http://www.ijnet.or.jp/EAJ/



第3回日中韓 Round Table Discussion 報告

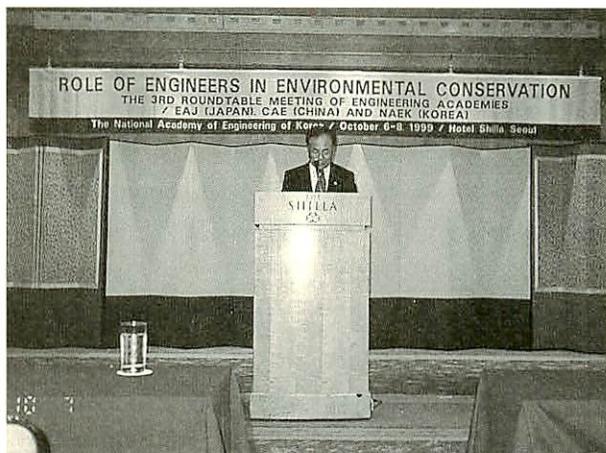
国際委員 鈴木 浩 / HIROSHI SUZUKI
専務理事 桜井 宏 / HIROSHI SAKURAI

今年で第3回となった日中韓3国工学アカデミーのラウンドテーブルは、10月6日夕のレセプションから10月8日迄韓国のソウル (Seoul) で開催された。日本工学アカデミー (EAJ) からは、各セッションについて専門的知識を持つメンバーの参加が望ましく、また、開催地がソウルで旅費も高額にならないので、団長及び3人の専門分野メンバーとEAJの運営、企画等を担当している専務理事を加えた5人で参加する予定であった。残念ながら出発直前になり、団長にお願いした堀副会長が体調を崩された為、富浦梓会員 (政策委員、国際委員)、鈴木浩会員 (国際委員、東アジアWG主査)、後藤典弘氏 (国立環境研究所社会システム部長)、桜井宏専務理事の4人で参加した。

1997年の第1回の会合以来3国の工学アカデミー関係者の交流も次第に増加し、3国それぞれのアカデミー活動についての相互協力、アカデミー間の協力事業の企画のための情報交換等、日本工学アカデミーの当初の企画に沿った方向に活動が展開していく傾向が見られた事は大変喜ばしい。

今回の会議は韓国工学アカデミー (National Academy of Engineering of Korea) が創立後多国間レベルでホストとなった最初の会議であり、非常に力を入れて十分に準備されたものであった。第1回 (1997、日本大阪)、第2回 (1998、中国杭州) 共に参加したNAEK副会長の金永旭 (Young-Wook Kim) 氏を委員長とする組織委員会を編成し、テーマとして環境問題を取り上げはしたものの議論があまりに専門的な枝葉末節

に発散しないで、環境保全に対する技術者の役割に集中する様な気配りが至る所に見られた。



科学技術大臣 徐 廷旭氏

公開となったオープニングセッションは徐廷旭 (Jung-Uck Seo) 科学技術大臣の都合により予定を若干変更し、15分程早めて、同大臣の歓迎の挨拶を含めた基調講演から開始された。科学技術大臣の出席と講演は、NAEKのCAETSへの入会に向けて「NAEKは産業省系で、科学技術省との関係がはっきりしない」との一部の批判に答えるために用意された趣旨もあった様である。基調講演はこれからの科学技術の方向、科学者・技術者のあり方について極めて示唆に富む、しかも格調の高いもので、3国ラウンドテーブルの開幕にふさわしいものであった。特に「正義に沿った技術」、「信頼できる情報の重要性」について述べられた部分は多数の聴衆の共感を得た様であった。

この後、李基俊 (Ki-jun Lee) 会長の短い歓迎の言葉に次いで、韓国側組織委員長の金永旭副

会長の環境問題そのものについての基調講演があり、オープニングセッションを終了した。金副会長はソウルの大気汚染が激しい事から説き起こして、「環境問題は地域問題から地球全体の問題に広がり、これまでの公害問題としての取り扱いからすべての市民が加害者と被害者になり、資源から製造、使用、廃棄のすべての局面での管理が必要になった。国際的にもこの考え方が受け入れられてきており、これらの問題の克服には『技術者の教育』、『技術移転』、『国際条約の遵守のための技術』などが重要になってくる」との、次のセッション以降での議論のフレームワークを示された。基本的には、我が国で一般に考えられているものと殆ど同様なアプローチで違和感はなかった。

次いで、3国メンバーによるラウンドテーブルのセッションに入ったが、まず気がついた事は、中国アカデミー (CAE) の代表が合計7人も参加しており、ラウンドテーブルに着席する人数としては韓国以上になっていた事である。聞くところによると最初は宋健 (Song Jian) 会長も参加の予定で、韓国側も宋氏のオープニングセッションでの講演を予定していたが、途中で他の用務と重なったため出席不可能になった由であった。中国代表団は、CAEの副会長5人のうちの1人で環境委員会の主任でもある沈国舫 (Shen Guofang) 氏を団長に、同委員会関係の学者4名と国際部副部長及び環境委員会事務方スタッフ1名の7名であった。韓国側の代表団は、組織委員長の金永旭氏に加えて環境関係の学、官の関係者6名からなっていたが、ラウンドテーブルへの着席は交代制で組織委員会のメンバー3、4人のほか李基俊会長が殆ど出席した。そのほか事務局担当の金修三 (Soo-Sam Kim) 副会長も半分近く出席し、また3人の副会長のもう1人の南正鉉 (Chung-Hyun Nam) 氏もレセプション、夕食等に参加するなど韓国側の意気込みが感じられた。

今回の主テーマとして韓国側が取り上げた「環境保全における科学技術者の役割について」のテーマは、「環境上望ましい持続可能な発展に向けての工学教育の展開の方向」「環境産業の発展のための技術移転」及び「国際環境協定に適合させるための技術的共同対処方策」の3つのセッションに分けて進められた。各セッ



オープニングセッション

ションについて3国のうち1国の代表が若干長い発表を行い、他の2国の代表がそれについてのコメントを加え、各国の意見も開陳。その後全員で自由討論をしながらアカデミーとして何が出来るかに結論を絞っていく方向で韓国側の座長が努力していた。

工学教育のセッションでは、各国の大学における環境関係の教育の現状についての話から進んで「環境工学教育は環境の専門家ばかりでなく技術者のリーダーに対する工学倫理教育の中に含まれるべき」との考えから、「ソウル国立大学では毎年5000人の全新入生に対し、倫理の基本についての特別な教育を導入した」由の李会長 (ソウル国立大学学長) の紹介があった。技術者については「倫理的な側面も重要であるが、新プロセスや新製品が環境に対して及ぼす影響を予測する能力が重要である」と指摘された。また新しい独立した学科としての環境工学科については、そのカリキュラム—学の体系—と卒業生の就職先分野などが話題になった。

技術移転のセッションでは、環境技術の移転をその「移転技術に関して高額の投資を伴う所謂環境産業の技術 (排煙脱硫など)」と「全ての産業のプロセスや製品の改良により、高額の投資なしに僅かな費用で、結果として環境の保全に大きな効果のある技術」に分けて考え、特に中国などの発展途上国は後者に力を入れるべきと、日韓両国は強く主張した。中国は一定の理解は示したものの、発言は環境産業そのものに限られていた。これは中国の代表団の中に一般の製造業関係者が1人も入っていなかったこともその理由と考えられる。

最後の国際条約への対応についての討議では、韓国側が日本側とほぼ同じ対応をしているのに反し、中国側の発表は国際条約に対応する

ためには更に先進国からの技術協力が必要で、その分野や技術を列記したようなものであった。「柔軟性措置のうちグリーンデベロップメントメカニズムは、発展途上国にとってメリットがあると思うか」との日本側からの質問に対し、韓国側は明白に「メリットあり」との回答をしたが、中国側は回答を留保し、見解の表明がなかった。

翌日のまとめのセッションでは、韓国側組織委員長である金永旭氏が議長となり、前日の基調講演で十分に話せなかった教育問題について同氏の考える問題点の指摘があった。更に「先進国から発展途上国への技術移転の重要性」、「持続可能な発展を可能にするための技術者の役割」等について追加があったが、内容は常識的なものであった。

最後に、前日の討議のまとめが上記の様な内容について行われ、今後の取り組み方についての議論に入った。そこで韓国側出席者の1人から、前日のディスカッションで教育問題や技術移転について興味ある討論が行われたが、3国共通の問題もあるので、「3カ国のアカデミーで合同の委員会の様なものを作り、共同で研究し、報告書を作っては」との提案がなされた。この提案に対しEAJ、CAE及びNAEKの執行部側は、「このような提案が出てくるのは3国工学アカデミーラウンドテーブルの当初の狙いでもあり、このような委員会が出来て3国が共同して事業を行うことは、極めて望ましいことである。しかし、それをスタートするにはその目的、テーマ、参加者、会合の様式、期間、経費等について十分に検討してから実施せねば良い結果は得られない。今回このような提案があった事を前向きに受け止め、次回2000年の第4回会合までにホスト国アカデミーから、今回の討議の結果も考慮に入れ、共同作業で成果が考えられる2、3の優先度の高いテーマ候補を提案し、その取り組み方について若干の事前調整も行った上で、次回会合で正式に決定するのが望ましい。」とのことで意見が完全に一致した。その際の共同作業の進め方の一例として、学振149委員会が米国NRCと実施し、ほぼ終了しつつある共同Task Forceの取り組み方を日本側から紹介した。

以上の結論で環境関係の討議を終了し、次に

3国のアカデミーに関係する諸問題について情報と意見を交換した。3アカデミー相互に関係する項目も第1回、第2回に比べ格段に増加した。最大の話題はNAEKのCAETS加入問題であった。韓国側は、EAJとCAEが共にホストとしての韓国側の趣旨に適った相当数のメンバーからなる代表国を派遣し、その代表に、科学技術大臣(会員)をオープニングセッションに招いて講演をしてもらうという実績を示せた事により、非常に心強く思った事と思う。会議では「EAJはCAETSメンバーとしてNAEKを支持する事は変わらないが、友好団体であるべき韓国科学技術アカデミー(KAST)を敵とすることは今後にしこりを残し、NAEKやCAETSの事業に障害を出しかねないので、うまく妥協点を探りたい」との意向を表明した。CAEは単純にNAEKへの支持を表明した。これに対しNAEKの李会長より「KASTのCAETS加盟申請はKASTの機関決定のプロセスも経ない会長専決であり(李会長はKASTの会員でもある)、かつ、本件に対する全武植会長の態度が頑なで妥協点を探れないでいる。場合によってはCAETSのレビュー・ミッションに判断を委ねざるを得ないかもしれない」との現状の表明があった。

次の項目として、現在米国NAEとEAJの間で準備中のFrontiers of Engineeringの第1回会合(2000年、日本)に中国と韓国の代表をオブザーバーとして各2、3名招待し、第2回会合(2001年、米国)は4国合同で実施することについて提案を予定し、韓国側議長に事前に通知しておいたが、CAEの代表から先に話が出され、韓国側も異論なく協力することになった(本件はNAEよりEAJに対し中国の参加を希望してきたのに対し、EAJは韓国の参加を条件に同意したものである)。

また、CAEよりは2000年10月3日～6日、北京で開催予定の2000年工学・技術科学国際会議(International Conference on Engineering and Technological Sciences 2000)に対する特別講演講師の紹介依頼及び参加勧誘があり、EAJからは2000年3月6日～8日開催予定の第5回国際シンポジウムへの多数の参加を要請した。

以上で公式の討議は終了し、2巡めの第4回会合を2000年秋を目標に日本で開催する事を決定して閉会した。

背景と考え方

地球環境専門部会ではこれまで、LCA-WG、EPI-WGによって(1)工業製品のライフサイクル価値提案、と(2)産業別環境負荷指標の提案を行ってきた。こうした活動は多様な領域で専門家を擁する日本工学アカデミーに相応しいものであり、その独自性の高い成果は海外でも評価されてきた。

しかし、地球環境の問題に関する情報は、多様多元であり、そこから具体的な対応策を生み出すには産官共に戸惑いがある。その中で、廃家電、容器リサイクル、排ガスなど、種々の規制として市場経済に直接影響を与える場合には、行政も企業も素早い対応を見せるが、地球温暖化問題に見られるような時間的にも、空間的にも喫緊でない問題への取り組みにおいては、自動車でも検討されているグリーン税制のように関係者間で利害の一致を見出すことは簡単でない。

当検討WGは、LCA-WGで提案した「工業製品のライフサイクル価値」を具体化し、またEPI-WGの提案指標を生かすため、行政、企業、個人が共通に関わりを持つ集合住宅を検討対象として選択し、その短期的な価値(市場経済での価値)と長期的な価値(持続可能な社会での価値)をリンクさせる仕組みを見出す事を目的としている。これまで日常生活におけるエネルギー消費の実態調査や、未来住宅のあるべき姿については日本建築学会の「建築物に関するLCA分析調査」、資源協会の「大都市生活のライフサイクルエネルギー調査」、通産省の「生活価値創造に関する国家プロジェクト」などの検討があるが、市場経済の立場から未来課題を捉え、それを実現するという具体的な提案にはなっていない。私達は持続可能な社会構築の仕組みを具体的に示すことによって関連する社会システムや技術開発の有り方が明確になる事を願っている。

私達が都市で働き、創造し、住み、楽しみ、必要に応じて(居住者や物件が)流動することをサポートする集合住宅という生活空間は、同時に多数の工業製品を包み込み、それらの使い方に大きく影響する存在である。そして地球環境負荷低減の実践の場ともなり、結果的に持続可能な発展に寄与する「高い志」と「実現の手段」を与えてくれる場でもある。

検討計画

1) 期間：平成11年11月～12年10月(1年間)

2) メンバー：部会長：山路 敬三

主 査：岡田 新一(会員)

副主査：村田 朋美(会員)

委 員：竹林 芳久

(清水建設/設備技術)

広松 猛

(竹中工務店/LCV)

野城 智也

(東京大学/建設システム)

* 検討WGは小人数でスタートし必要に応じて新しい委員を加える。

3) 主な検討内容：

都市における集合住宅の有るべき姿を(1)エネルギー、資源の生産性向上、(2)創造空間性、快適居住性、安全性、信頼性、資産価値、ストック化などの経済性向上、そして(3)次世代街区構想のような広域居住性、社会性の確保を具体化する視点から検討し、それを実現するため私達は何をしなくてはならないか、また何が障壁であるかを具体的に示し、対応策を提案する。ただしWGでは考え方や具体化する仕組みの検討に重点を置き、数値化に必要なエネルギー原単位などは既存の信頼できるデータベースを活用する。

中部地区夏季講演会「技術の進歩と人間の幸せ」

中部地区の夏季講演会は、9月14日、本部より隈部英一監事をお迎えして、名古屋市内の厚生年金会館で開催された。この度は、京都大学大学院エネルギー科学研究科の前研究科長、新宮秀夫教授を講師にお迎えした。



新宮 秀夫氏

新宮先生は昨年、NHKbooksよりタイトル“**幸福ということ**—エネルギー社会工学の視点から—”の本を出された時の人である。今世紀、懸命に推し進めてきた工学に、いま、環境問題をはじめとする幾つかの陰の部分が見え始め、かつ、我々は物に満ち足りた生活が必ずしも幸福に結び付かないことを実感し、工学の未来に一抹の不安が覗かれる。今回“**技術の進歩と人間の幸せ**”という演題にてお話を伺うことができたのは、正にこれからの工学のあり様を素直に考えさせられる好機となった。それは先生が根からの工学者であり、話の内容は哲学の領域に入るものの、何となく取っ付き難い哲学者の話ではなかったことに拠るのかも知れない。

著書“幸福ということ”を書くに至った経緯、その後一年を経過しての感想に始まり、臓器移

中部地区担当理事 浅井 滋生 / SHIGEO ASAI

植の行き着く先を暗示するようなインドの説話集：パンチャタンドラからの話、「…からくり（機械）を使う者は、必ず心からくりをもつようになる。」という荘子（天地編）にみる孔子の弟子の話、フラクタル、カオスに表れる繰り返し操作が生む結果の恐ろしさ、さらには人間の感覚についてのウェーバー・フェヒナーの法則にみる人間の性から説き起こし、持論とされる“**幸福の四階建て論**”を展開、最後に、幸福を感じる社会の仕組みはどうあるべきか、これからどうしたらいいのか、の答えとして仏典の“**不可思議解脱**”で話を結ばれた。先生はギリシャ、中国、インド、アラビアにわたる洋の古今東西の“幸福”に関する数百の書を読破されたとのことであるが、その片鱗ともいべき博識が随所に伺われた印象深い講演であった。

会員の多くは工学のみならず哲学にも大きな関心を寄せているせいも、講演会後の懇親会の席でも、新宮講師が食物に箸をつける機がない程に質問が出、出席した会員からも質疑に絡み数々の含蓄のある話を伺うことが出来た。また、松尾名古屋大学総長からは大学法人化の近況が述べられ、これについても活発な意見交換がなされ、予定時間を1時間も経過して散会する程の盛況であった。

第109回談話サロン「エネルギーの視点から21世紀の運輸のあり方を考える」

運輸・交通WG専門委員 太田 健一郎 / KEN-ICHIRO OTA

日時：平成11年9月20日（月）

場所：弘済会館

講師：笹木 和雄会員

東京大学名誉教授

(社)日本工学アカデミー

エネルギー専門部会部会長

運輸・交通WG主査

第109回談話サロンでは、東京大学名誉教授で日本工学アカデミーエネルギー専門部会会長であり、同専門部会運輸・交通WG主査である笹

木和雄氏から「エネルギーの視点から21世紀の運輸のあり方を考える」と題する講演を伺った。

まずこれからのエネルギーの紹介があった。20世紀の経済発展は先進国の大量生産、大量消費に支えられたものであった。21世紀には発展途上国の経済成長、人口増加と相俟ってエネルギー消費の急増が予想される。一方これを支える石油の生産は2030年頃をピークに停滞期、衰退期へと推移するものと予想される。我が国運輸部門のエネルギー消費は最終エネルギー消費の現在25%を占め、その比率は徐々にではある

が増加しつつある。この運輸部門のエネルギー消費は石油が98%と圧倒的に大きく、輸送手段としては自動車とトラックが60%を占める。車の利用を前提とし発散した都市への変化が、石油の非効率利用に拍車をかけているとのことである。



笛木 和雄WG主査

次は自動車技術の紹介がなされた。自動車に関しては「環境に優しい」、「エネルギー効率の良い」をキーワードに従来型エンジンの改良とともに、天然ガス自動車、電気自動車、燃料電

池自動車と言った新しいタイプのものの開発が積極的に進められている。特に固体高分子型燃料電池を利用する自動車は話題の中心となっている。都市交通問題は渋滞、環境破壊へとつながるが、これを解決するためには道路施設の整備、改良と言った容量増加と交通量規制の良いバランスが必要と指摘された。

最後に交通負荷の小さい都市の構想が提案された。人口50万人程度で、都市中央にターミナルをおき、都市内部は人と物流を分けて移動するという省エネルギーが実現できそうな構想である。

講演後、エネルギーの将来、新しい自動車技術に関する活発な質疑応答が行われた。



第110回談話サロン「コンピュータ制御鉄道信号システムの安全性技術」

安全工学関連WG専門委員 池田 博康 / HIROYASU IKEDA

日時：平成11年10月6日（水）

場所：弘済会館

講師：平尾 裕司氏

鉄道総合技術研究所

技術開発事業本部輸送システム開発推進部主幹技師

(社)日本工学アカデミー

情報専門部会安全工学関連WG専門委員

第110回談話サロンは、日本工学アカデミー情報専門部会安全工学関連WG専門委員の平尾裕司氏より「コンピュータ制御鉄道信号システムの安全性技術」について講演を伺った。

情報システムは重要な社会的基盤の一つであるが、その制御、管理にはコンピュータが大きな役割を担っている。それらのシステムの安全性と信頼性は、コンピュータに大きく依存しつつあるが、安全面から見て、コンピュータ導入はその信頼性を向上するだけでは不可で慎重であるべきである。そこで、安全工学関連WGでは、コンピュータ利用を前提とした安全性の実現のための論理や技術の体系化を検討している。

さて、鉄道信号システムは、15年ほど前から各種保安制御装置にコンピュータを導入して運用されている。御講演では、機械的な信号機の時代から電子回路、マイクロコンピュータ利用

に至るまでの信号システムの技術変遷を簡単に紹介された後、マイクロエレクトロニクスを導入した鉄道信号システムの安全性手法について説明された。



鉄道信号の分野では、システムに障害が生じた場合に安全な状態を維持、あるいは安全な状態に遷移して固定することが要求される。このような最終的に列車停止を確保するためのフェールセーフ技術を基本とし、さらに各種高信頼化技術と安全性管理を組み合わせた手法が採られている。具体的なシステム構成方法として、冗長化、故障診断、異常検出時の出力安全側固定をキーワードとした種々のハードウェアとソフトウェア手法について解説された。特に、高信頼性は安全確保のための必要条件ではあるが、それのみでは十分ではないという考え方を徹底してシステムを構築することを強調された。

さらに、コンピュータによる列車保安制御の新たな安全性技術指針と欧州規格、国際規格(IEC61508)との関連や、リスク解析、安全性技術の評価手法などについて、日本の占める地位と今後の課題も含めて説明を加えられた。

御講演後、アベイラビリティの考え方やソフ

トウェアのフォーマルメソッドの適用、人間介在システムの安全確保などについて質疑応答が

行われ、知見を新たにした。

NEWS

第111回談話サロン「21世紀における我が国の情報通信産業発展のための戦略」

情報技術研究開発体制WG専門委員 宮部 博史／HIROSHI MIYABE

日時：平成11年10月25日（月）

場所：はあといん乃木坂

講師：野口 正一会員

会津大学学長

(社)日本工学アカデミー

情報専門部会副部会長

情報技術研究開発体制WG主査

インターネットの急激な浸透とそれを用いた各種サービスの発展に見られるように、21世紀の最も重要な産業は情報通信産業である。この分野における中心的研究開発とマーケット開拓は一貫して、米国を中心とする大学、企業の研究・開発グループによって推進されており、日本の貢献に対する評価は芳しくない。「改良技術は強いが、革新的技術開発は弱い」「ハードウェアは強いが、ソフトウェアやサービス開発では弱い」等の日本に対する評価を一新し、21世紀においてこの分野で世界の指導的位置を占めることは、産業界全体の地盤向上の観点からも緊急の課題である。

講師は永年日本の情報通信の研究開発をリードされてきた会津大学長の野口 正一氏。この分野の研究をリードするだけでなく、東北大学工学部教授時代から産学共同のプロジェクト「インテリジェントコスモス構想」の推進など東北地区学術・経済の発展に大きく寄与され、現在も福島で同様の取組みを主宰されている。

本講演では、最初に情報通信産業の重要性に触れた後、日米の技術輸出という観点からこの分野が如何に米国技術に依存しているかということの端的に指摘された。この後、この分野で世界に伍



していくためにはグローバル戦略が必須であり、その中でも政府の果たすべき役割が極めて大きいことを、米国政府の戦略、欧州での研究開発の実情を多くのデータで指摘され、今後の行動指針についても歯に衣を着せない先生独特の言いまわしで指摘された。講演の最後には、具体的な課題への対処例として、ベンチャー育成方法、産学共同の進め方などを先生の今までの活動経験を交えてお話しされた。講演の後、出席の多くの方から色々な意見を頂戴し、予定の時間内に質疑応答が終わらないのではという危惧を抱かせるほど白熱した。その中で、幾人かの方からはこの報告をこの場だけで終わらせないで、政府にも直接伝えて欲しいという励ましのお言葉も頂いた。

約75分の講演時間であったが、出来ることならもう1、2時間続けて話しを聞きたいと思ったのは私だけではなかったと思う。WGで同じ趣旨の先生の発言を何度となく聞いている私にとっても実に感銘の深い講演であった。

NEWS

日本学術会議第5部との懇談会

専務理事 桜井 宏／HIROSHI SAKURAI

恒例の日本学術会議第5部との懇談会が、10月25日、日本学術会議の総会と時を合わせて開催された。当日夕刻開催された日本学術会議側の運営審議会が予定より長引いた為、吉川弘之会長はじめ何人かの幹部の方々の出席が遅れはしたものの、会長ほか佐々木恵彦副会長(農学)、

大橋秀雄第5部長などを含む多数の日本学術会議会員や関係者の出席を得て、楽しく有意義な会となった。

最初に永野会長から、日本学術会議50周年と世界の科学アカデミーのリーダーとして日本学術会議がホストとなるインターアカデミーパネ



日本学術会議第5部会員との懇談会

ル2000の実現についてのお祝いを含めた簡単な歓迎の辞があり、次いで日本学術会議側から大橋第5部長が、国立研究所や国立大学の独立行政法人化に対する意見のとりまとめなどについての日本工学アカデミーとの協力関係の深まりについて御挨拶があり、岡村名誉会長の御発声で乾杯した。

しばらく歓談の後、佐々木副会長から工学アカデミーに倣って農学アカデミーを発足させた事などを含めての御挨拶、最後に会議終了を待って急いで参加された吉川会長からは、今回3年任期の国際科学会議 (ICSU、International

Council of Science) の会長に日本人として初めて就任された事などの御紹介があった。

海外先進諸国では科学アカデミーと工学アカデミーが相携えて活動している国が多いが、日本学術会議会長が世界の科学アカデミーの中でICSUの会長となり、又、頻度の高くないインターアカデミーパネルの全体会議をホストする立場になったことは、日本学術会議の学術団体としての国際交流への努力が実ってきたものである。日本工学アカデミーの技術者団体としての国際交流と相補うところも多く、益々協力関係の重要性が高まったことを痛感した一タであった。



日本学術会議会長
吉川 弘之氏



副会長
佐々木恵彦氏



第5部部長
大橋 秀雄氏

新入正会員の紹介

分野 (1, 2)	松島 克守	東京大学大学院工学系研究科教授
(2)	諏訪 基	大阪工業技術研究所所長
(4)	中原 信生	神奈川大学工学部建築学科特任教授
(7)	鈴木 昭憲	秋田県立大学学長

INFORMATION

顕彰・叙勲について

1999年度の文化勲章受章者及び文化功労者、秋の叙勲受章者が発表され、当アカデミー会員の方も多数その栄に欲されました。心よりお祝い申し上げます。

文化功労者となられました熊谷信昭会員、堀川清司会員の御業績については、次号に掲載を予定しております。

事務局年末年始休業のお知らせ

来る12月29日(水)より1月3日(月)迄、事務局年末年始休業と致しますのでどうぞ宜しくお願い申し上げます。

賀詞交歓会のお知らせ

2000年1月14日(金)

虎ノ門パストラル 新館5階

- ・理事会：10：00～12：00 牡丹
- ・懇親会：12：00～14：00 桔梗

編集後記

今年も見ました獅子座流星群。澄んだ夜空を10分に1つ星が流れていきました。無心で空を眺められる平和な時が永く続きます様に。皆様、どうぞ良いお年をお迎え下さい。



社団法人
日本工学アカデミー広報委員会